

植物画への誘い

●はじめに

「なぜ花の絵を描くの？」という問いに「なぜあなたは描かないの？」という答えで始まる植物画のテキストブックがあります。私も全く同感です。一度花の絵(植物画)を描くとりこになると、ただ見ているだけなんてとてもできなくなるものです。感動する心と落着いて観察することのできる人なら、ふつうの絵と違ってけつしてむずかしいものではありません。植物画のコンクール入選者の中には小学一、二年生がいます。簡単にその歴史をお話して、用具と描き方の手順をご紹介します。よろしくお願いします。

●植物画の歴史と今日の植物画

植物画。あまり聞き馴れないことばですが、ヨーロッパではボタニカルアートと呼ばれ、古い歴史をもっています。昔、葉草の形を伝えるために正確な植物の図が必要でした。根や莖や葉、そして花や実などができるだけ正確に描かれ、銅版画や石版画に刷られ、手で彩色されました。その後につつた植物学の発達にも植物画は貢献致しました。日本でも同じ目的で本草図というものが作られました。花鳥画の伝統のある国ですから、本来の実用の目的以上にはならなかったようです。写真が現われて従来の説明図としての使命が半ば終ると、その美しさがクローズアップされ、今日の植物画になった訳です。美しさに比重がかかったとはいえ、科学(客観性)と美術の緊密な結びつきは変わっておりません。

●描くにあたって

美しいものを見ると人はどうして感動するのでしょうか。涙が出たり、笑ってしまったり、きつと人間は感動する動物なのでしょう。そんな経験のない方は、是非一本の花をコップに差して、ルーペでご覧になって下さい。生きているものの形と、自然の造形の巧みさを発見してびっくりするにちがいありません。感動さえあれば、あとはとても科学的(?)に作業は進みます。

① 咲いているように花を差しましょう。剣山や洗濯ばさみを利用します。よい角度を決めて。

② 莖、葉、花を定規で実測します。同時に全体の動きとシルエットをおおまかに描いて下さい。実物大の影絵の輪郭線のようになればよいのです。押花をトレースして、全体の特徴をとらえる勉強もあります。全体からだんだん細部に描き進めます。鉛筆はH、B、紙はなめらかな画用紙。

③ 鉛筆の写生ができたなら、むだな線を消して彩色します。消しゴムのごれや鉛筆の線がきたない時はトレースをします。

トレッシングペーパーに鉛筆をぬって作ったカーボン紙からライトテーブル*を使い、鉛筆の仕上げは3Hで、なるべくうすく細くはつきり。彩色は明るい部分から始めて色を重ねながら仕事を進めます。

*ライトテーブル ガラスの下からライトをあてたテーブル。

④ 額装。作品が出来上ったらサインをし

て額に入れて飾ってみましょう。苦勞がきつと報いられるでしょう。

● 早い人は五枚程描くと(二ヵ月)、ゆつくりの人で十枚描くと(半年)、こつを飲みこみ楽しくなります。

● 植物図鑑(写真でないもの)や植物画の本を見たり、写したりするのはとても勉強になります。

● 植物の名前や構造を知ることでも大切です。

● さつぽろ野の花の会では月に一度、植物画勉強会をしています(無料)。

● 連絡先(事務所)〇二一七三七七七八四二 用具について(参考までに)

用紙 BBケントの細目

絵の具 透明水彩(ペリカンやウインザ

ーニユートン)

筆 ウインザーニユートンのセーブル

の細筆(〇号〜四号)が使いやすい。あるいは日本画の面相筆など。

(さつぽろ野の花の会会員)

野の花はレーダーである

さりげないふうをして

宇宙の神秘を受信している

野の花は塔である

風の音をききながら

遙かな地平を眺めている

野の花はささやかである

しかし

生命の尊厳に溢れている

(清水 敦)



▲ユウゼンギク (1985.9)



▲ツユクサ (1985.8)

植物画への誘い

清水晶子

▼ナナカマド (1985.10)



▲ヒダカエンレイソウ (1986.5)